

画家が愛した風景

みなみ くん ぞう
南薫造と旅する
瀬戸内の美

THE LANDSCAPE
THAT THE PAINTER LOVED
"BEAUTY OF SETOUCHI TRAVELING
WITH MINAMI KUNZO" MAP

📍 は南作品と似た景色が見えるスポットを指し、
➡ は見える方向を示す。



やすら
安浦

南薫造の郷里である安浦の地名は、「浦安かれ」に由来する。
《曝書》は南の自宅で書物の虫干しをする光景、《庭》は自宅の庭を描いたもの。
この自宅や庭は現在、南薫造記念館として公開されており、南の作品のほか、アトリエや画材、愛用の品々も見学できる。
また、同館の裏手からは、《農村風景Ⅱ》と同じ山並みが遠望できる。



《曝書》1916年、広島県立美術館蔵



《農村風景Ⅱ》1947年頃、南薫造記念館蔵



《庭》制作年不詳、広島県立美術館蔵

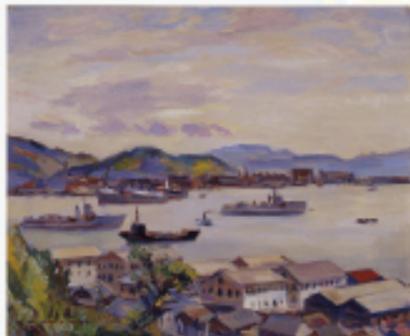


広島県立美術館

広島市

くれ
呉

九つの峰に囲まれた九嶺が呉の地名の由来といわれる。軍港として理想的な土地だったため、戦前は海軍の町として発展したが、1945(昭和20)年の空襲により焼け野原となる。
それから4年後に描かれた《江湾》は、多くの船舶が往来する様を明るく穏やかな色彩で描き、戦後の新たな時代の雰囲気表現している。



《江湾》1949年、広島県立美術館蔵



南薫造記念館

呉市立美術館

瀬戸内美術館

下蒲刈

蒲刈

かざはや
風早

地名は「豪族 風早氏」の名前が由来。古くから瀬戸内海航路における船舶地として万葉集にも詠まれている。
弟子によると南は風早の日の出を描くために、何日も始発の汽車で通ったという。また、同地には版画家・永瀬義郎(1891-1978)のアトリエがあり、南は永瀬が会長を務めた芸南文化同人会に参加し、地方における文化復興にも携わった。



《風早の日の出》制作年不詳、広島県蔵



《風早の日の出》1949年頃、南薫造記念館蔵



くらはし かろうと
倉橋・鹿老渡

地名は、朝鮮通信使がよく停泊したことから韓泊(からとまり)の転化と言われる。江戸時代には風待ち・潮待ちの港として栄え、現在も江戸時代中期に大名の本陣として建てられた家が残る。
南は、戦後に広島鉄道局主催の観光事業のため立ち寄った鹿老渡の風景を「絵として申し分ない」と称賛した。



《倉橋》(スケッチブックより) 1946年、個人蔵



倉橋・鹿老渡



しもかまがり
下蒲刈

風待ち・潮待ちの港として、江戸時代には立ち寄った朝鮮通信使がその歓待ぶりを称えた。三ノ瀬地区には当時の面影が残る。
南は、みかんが豊かに実る景色を「宮々たる温かい太陽の光を浴びて穏やかな自然と勤勉な人生を感じる」と語り、みかんが象徴する瀬戸内の生活、その風景を愛した。



《下蒲刈の風景》1949年、広島県立美術館蔵



かまがり
蒲刈

地名は神功皇后が立ち寄った時、失くした櫛を探すために生い茂る蒲を刈ったことから名付けられた。
《半山のみかん畑》は、みかんの鮮やかな色彩と、海の青色とのコントラストにより瀬戸内の特徴的な風景を見事に捉える。



《半山のみかん畑》1949年、瀬戸内美術館蔵

